

第3回目・オランダ農業協力対話第2回分科会の概要
(テーマ:オープンイノベーションと国際研究協力)

1 日時等

日時：2022 年(令和 4 年)7 月 11 日(月)14時40分～16時45分

場所：農林水産省

2 出席者

オランダ側：農業・自然・食品品質省、トップセクター、ワーヘニンゲン大学、駐日オランダ大使館

日本側：内閣府、農林水産省、農研機構、在オランダ日本国大使館

3 情報・意見交換

まず、農林水産省西川国際交渉官から、開会のあいさつとして、本日の対話は 9 月に開催される日オランダ農業協力対話の前に専門的な見地から、両国の専門家による情報交換及び意見交換を行うための会議で非常に重要なものである旨発言。また、日本側からのプレゼンは3つであり、1つ目は我が国の科学技術イノベーション政策全体の話、2つ目は、農水省でのオープンイノベーションと国際研究協力の実態、最後3つ目は、農業系の技術実証の現場から、農水省が所管する研究系の独立行政法人である農研機構から最先端の現場の実証の状況等をプレゼンする旨発言。

(1)日本側発表

①日本の科学技術イノベーション政策：内閣府科学技術・イノベーション事務局

○科学技術・イノベーション会議(CSTI)は、基本的な科学技術イノベーション政策を決定し、予算を決め、何が必要な研究か評価することとしている。CSTIでは、農林水産省をはじめとする14省庁とも協力。科学技術イノベーション計画を5年ごとに作成。

○ムーンショット型研究開発制度は新しい破壊的イノベーションを創出することを目的として、9つの目標を設定。未利用の生物機能等の活用により、持続的な食料供給産業を創出するという目標5は生物系特定産業技術研究支援センターにて管理。

○戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)は、CSTI が国家的に重要な課題の解決のために、課題(プログラム)を設定。第2期の課題において、農業分野はバイオ産業と農業・食品流通に関する研究開発と社会実装を目指したプログラムを小林プログラムディレクターの下で実施。現在、第3期の課題が検討されており、持続可能なフードチェーンの構築も含まれている。

②農林水産省におけるオープンイノベーションと国際研究協力：農林水産省技術会議事務局

○国際研究協力の主な取組の1つとして、行政ニーズに基づく、二国間国際共同研究事業を紹介。両国間で決定した研究分野について課題の公募を行い、両国の協議により採択、それぞれの国が、自国の研究実施機関へ研究費を支出する仕組み。

○『知』の集積と活用場(FKII)を通して、オープンイノベーションを推進。FKII には、現在 4,295 の会員が所属し、468 もの研究が実施。

○FKII での研究成果を紹介するとともに、これまでに実施した共催セミナーや今後の海外協力の方針を紹介。

③日本における施設園芸の概要とスマート農業実証プロジェクトを活用したオープンイノベーション活動の紹介：農研機構農業ロボティクス研究センター・農業情報センター

○日本の農業生産の4割を施設園芸は占めており、施設園芸は新規就農者の関心が高い。日本の施設園芸は課題が3点ある。①生産性が低いことから ICT を活用し収量を上げていきたい。②就農者が減少しているのにも関わらず規模が拡大していないことから、ICT やロボットを活用し最適化・効率的な生産を目指す。③光熱動力費が高いことから、地域のエネルギーを活用し、ICT による最適化を目指す。

○これからの課題を統合的に解決するため、スマート農業実証プロジェクトを全国各地で実施。プロジェクト事例を紹介。

(2)オランダ側発表

①イノベーションと競争力：オランダ農業・自然・食品品質省

○オランダでは、イノベーションや技術開発には官民の協力を重要視している。ウクライナ情勢によるサプライチェーンの混乱はオランダにおいても課題となっている。オランダの農業分野のための「知識・イノベーション・アジェンダ」は、循環農業や気候変動に対応できる農業を目指すなど6つのミッションから構成されている。

○イノベーションでは、これまで効率性が重要視されていたが、今日では持続可能性が重要となっている。既存の規制は、例えば遺伝子組換えなどの分野でイノベーションの妨げになることがある。

②トップセクター・アプローチと園芸種苗セクターの紹介：トップセクター園芸種苗

○トップセクター園芸種苗は、オランダ経済社会において重要な分野の1つであり、果樹、樹木、花き、種苗などの分野を含んでいる。トップセクターの主な活動としては、研究やイノベーション、教育、国際プログラムや知識の共有がある。トップセクター園芸種苗にも6つのミッションがあり、他の産業と連携している。

○トップセクター園芸種苗は、シードマネー・プロジェクト(研究協力の可能性を探ることを目的としたプロジェクト)など様々なプロジェクトに資金を提供しており、温室ロボットやデータ駆動型

家畜生産に関するシードマネー・プロジェクトや、データ駆動型の馬鈴薯サプライチェーンに関する二国間研究プロジェクト TTADDA など、日本の関係者とのプロジェクトにも資金提供している。毎年、プロジェクトの公募を行っており、企業、NGO、政府機関が協力している事例を紹介。

③日蘭温室ロボットシードマネープロジェクトの次のステップ：ワーヘニンゲン大学研究センター

- オランダでは、就農者の高齢化も問題となっており、ロボティクスに関心が高く、ベンチャー企業への投資も高まっている。また、標準化に向けても協議を開始している。施設内の労働環境の改善などの研究もしている。研究技術例を紹介。
- オランダでは、ロボティクスへの投資を容易にするため、園芸技術企業と自動車企業が合併する傾向が見られる。しかし、オランダが農業技術で先進的とされる一方、日本はロボット技術で世界的に先進的とされる。そこで、シードマネー・プロジェクトでは、この分野におけるオランダと日本の企業間の協力の可能性を探っている。
- 今後の課題としては、ハイテク技術やロボティクス技術の原価が高価であること、開発スピードなどがある。

駐日オランダ大使館ルッツ農務参事官から、閉会のあいさつとして、ほぼ2年ぶりに対面での実施ができたことを嬉しく思うとともに、これまでの対話を通してよいプラットフォームが形成できている旨発言があった。また、今回の分科会では、将来の課題解決のためのオープンイノベーションと官民における協力についての理解を深めることができた。二国間のイノベーションの取り組みをさらに進めていくための第一歩となったと思う旨発言があった。

在オランダ日本国大使館吉川一等書記官から、全体をとおしてのコメントとして、今回の分科会は興味深いテーマであり、対話の重要性を再度認識するとともに、さらに協力関係を進めていきたい旨発言があった。

- ・農業・自然・食品品質省 フレデリック・フォッセナー特使
- ・トップセクター園芸種苗 アネケ・ファン デ カンプ役員
- ・ワーヘニンゲン大学研究センター農業食品ロボティクス
エリック・ペッケリット プログラムマネージャー
- ・駐日オランダ大使館イノベーション・科学技術部
エリック ファン・コーイ参事官
- ・駐日オランダ大使館農務部 デニーズ・ルッツ農務参事官
- ・駐日オランダ大使館農務部 齊藤裕子農務アドバイザー

- ・ 内閣府科学技術・イノベーション事務局国際担当 有賀参事官
- ・ 輸出・国際局国際地域課 西川国際交渉官
- ・ 技術会議事務局研究推進課産学連携室 大熊室長
- ・ 技術会議事務局国際研究官室 原研究専門職
- ・ 農研機構農業ロボティクス研究センター・農業情報研究センター 村上副センター長
- ・ 在オランダ日本国大使館 吉川一等書記官

4